神戸国際大学キリスト教センター通信
第 116 号　2024 年 7 月 16 日

「 空 気 」

神戸国際大学オルガニスト ミリアム 伊藤 純子

毎日蒸し暑いですね。先日まだ猛暑が訪れる前、急な坂道を下りながら不思議な感覚を体験しました。生暖かい空気と涼しい空気が交互にやってくる感覚です。暑いなと思いながら歩いていると突如としてどこからか涼しい空気が肌に触れ、空気の温度が確かにマダラ状になっていました。

そのきっかけで、だいぶ前の真夏に滝沿いの道で体感した現象を思い出しました。灼熱の太陽の下、急な坂道を登っていたら突然、急激に涼しくなりました。実際にその境目がカーテンで仕切られているかのように明確に、暑い空気と涼しい空気とが分離されていました。それが面白くて、あちらとこちらを何度も行き来してカーテンを味わっていました。

空気はもちろん目に見えませんし、温度によって色が違ったりもしていません。その時の体験はまさに、目に見えていなくても確実に存在している空気を、まるで目に見えているかのように、肌で実感した体験でした。

空気は「空」の「気」と書きます。「気」という文字が入った言葉は、すべて目には見えずとも、何か重大な役目を背負った力を持つワードです。

元気/やる気/気持ち/本気/気になる/気を遣う/空気を読む
すべて、目に見えず耳にも聞こえず手で握ることもできませんが、明確にその存在は確かに、まるで手に取るかのように認識できます。「気」を用いた言葉は、人間の中の奥底の一番根幹の部分に関わるワードばかりです。

生きていく中で、辛くて八方ふさがりで何かうまくいかないときは、往々にして、実際に目に見えるものだけを相手にして闘っているとき、とも言えるのではないでしょうか。

改めて考えてみますと、目に見える現象ばかりが気になって仕方ないときは、ガンジガラメに固めらて、底なし沼に溺れています。

そのようなときこそ、視点を意識的に変えて、目に見えないものに向かって心を傾け、耳を澄ますことによって、大きな発見があるのではないでしょうか。

ほんの些細な視点の転換によって、固定観念や思い込みが解放されて、どこまでも自由な世界が目前に広がることと思います。

ひとくちメモ

キリスト教では、神様の働き（聖霊）の象徴として、「風」が用いられています。聖歌集の中にも、そのような「風」を表現した歌が数多くあります。目に見えないものへ目を向けるための意識を、再確認できる歌です。

聖歌 382 番

神の息よ 吹き来たりて／新たなるわれに つくりかえよ
神の息よ われを清め／み心のままに なさせたまえ
神の息よ われをもちい／この世のつとめに 燃え立たせよ
神の息よ われを生かし／つねに主のものと ならせたまえ